

# ガンからの 帰還

心の痛みと向きあうとき

## ステイーブン・レイヤー

がんは《ペインボディ》で、最初は目に見えない形からはじまって、長い時間をかけて増殖し、エネルギー的に蓄積されたものが肉体的に目に見える病気となって現れます。それが、がんだったり、ある種の病気となるのです。



インタビュー：えつこ

えつこ 私は今、ここバイロンベイにラハシャ博士のコースを受けに来ています

が、そこで、ラハシャのコースを受けてが  
んが治った方がいるという話を聞き、くわ  
しくお話を伺いたいと思いました。インタ  
ビューをお引き受けいただき、ありがとう  
ございます。

はじめに、あなたの経歴からお伺いして  
もいいでしょうか？

ステイーブン 私は1961年にアメリカ  
で生まれました。私の家族には多くの機能  
不全があり、とてもチャレンジの多い子ど  
も時代を過ごしました。兄弟は私を含め3  
人で、母親はアルコール中毒でした。

自分が成長していく過程において、私は  
家族にながら起きているのが理解できま  
せんでした。家族には愛がありましたが、  
母にながら起きているのがわからな  
かったのです。でも、母のことはとても大

切に思っていました。しかし、私には助け  
が必要でした。

人生のある時期、学校では五年生のとき  
でしたが、10歳のころ、とても悩んでいま  
した。そのころ学校には私にとって特別な  
先生がいたので、助けを求めようと思いま  
した。

ですが、ある日の放課後、ノートを先生  
に渡そうとしたときに、「いや、やっぱり  
渡さないでおこう」と思ったのです。その  
とき以来、自分の人生の出来事は、すべて  
自分の内側に埋葬することにしました。人  
生や家族の間で起きたことすべてを、自  
分の身体の内側に埋め込んでしまったた  
です。

そのときは気がつかなかったのですが、  
そのとき私がしたことは、自分が生きてい  
くためにはしかたのないことでした。それ  
が正しいことだと思っていました。ですが

ら、10歳から38歳になるまで、そのように  
して生きてきたのです。どんな経験も、自  
分が気に入らなかったことや良くないと  
思ったことは、なんでも内側に埋めて、感  
じないようにしてきました。

そして、28歳で結婚しましたが、結婚生  
活は、私がこれまで内側に埋め込んできた  
ものすべてに対して妻が挑発し、刺激する  
ような毎日でした。

そこで私がしたことは、それは誰もがし  
ていることだと思つのですが、自分が抵抗  
を感じるような経験があると、そこから  
逃れる方法を見つけたそうすることで  
した。

見つけた方法とは、仕事中毒になること  
でした。私にはビジネスがあり、それだけ  
に専念し、集中しました。毎日、長時間ハー  
ドに働いて、その結果成功しました。

えつこ どのようなビジネスをしていたのですか？

ステイブン 私はエンジニアで、ソフトウェアの会社を経営しています。会社はインドニーにあつて、設立して21年になります。そういうわけで、私は仕事にとても集中し、成功することにすべてのエネルギーを注ぎ込みました。というのも、私がビジネスでほんとうに成功すれば、新しい家族へのすべての問題…妻との関係性の問題もすべて解決され、みんなが幸せになり、良くなつていくと思つたからです。彼女も私を愛してくれるだろうし、自分の内側にある居心地の良いフィリングも、成功しさえすればすべてオーケーになるだろうと思いました。

同時に、そのような居心地の悪いフィリングを、アルコールを飲んだりして避け

ようともしていました。アルコール中毒ではありませんでした。週末には友人と会つたり、パーティをしたり、また多くの時間を子どもと過ごすことにも当てましました。でも、いちばん多くの時間は仕事に当たっていました。

28歳で結婚して10年間、妻との関係性のなかではいろいろなことが起こりました。さらに居心地の悪さを感じるような出来事があり、それを感じることをさらに避けるようになりました。

ある日、とても傷つくことが起こりました。それはある意味、妻が私を裏切つたと思えるような出来事でした。ほかの男性とのことではありませんでした。私の目から見れば裏切りだと思えるようなことだったので。同じような感覚は、母親がアルコール中毒になつたときにも感じました。

それは感情的には「見捨てられた」ような、「彼女は自分のためにいない」ような感覚です。それと同じようなことを妻がしたのです。

そうして、感情的な痛みといったものが30年以上にもわたつて身体のなかに蓄えられ、それが突然、がんになったような感じでした。

**「あなたは身体ではない。あなたは目の背後にある気づきだ」**

えつこ なんのがんだつたのですか？

ステイブン 腸のがんです。非常に進行していて、医師には「そう長くはない」と宣告されました。

その4ヶ月ほど前から兆候はありま

た。私はそれまで自分が見たくないものは避けようとしていましたから、兆候も4ヶ月間見るのを避けていたのです。

えつこ どんな兆候だったのですか？

ステイブン 出血がありました。それを無視していました。診察を受けたときには、できるだけ早く、できれば3日以内に手術をする必要があると言われました。

がんと診断されて、私は感情的にとても不安定になりました。ヒステリックに泣いたり、バスルームのシャワーのなかでも泣いたり…。でも、子どもの前では…そのときは5歳の男の子と3歳の女の子でしたが、なにがともないよつにふるまっています。

私は抵抗していました。自分の死に直面したくなかつたのです。とても恐怖を感じ

ました。そしてそのとき…それがどのよう

に起きたのかはわかりませんが、私はシャワーを浴びながらヒステリックに泣いていたとき、あるメッセージがやってきたのです。

「お前は生きたいのか？ それとも死にたいのか？」

それは自分へのメッセージでした。

「自分は生きたいのか？ 死にたいのか？」

そのとき私は答えました。

「自分には子どもがいるし、死ぬなんてことは考えられない！」

そのように宣言すると、突然、私はとても穏やかな気持ちになりました。

ちょうど、そこでシフトが起きたような感じでした。とても《今ここ》にいる感じ

がしたのです。

その出来事が起こる以前、私は宗教的にもスピリチュアル的でもなく、普通の人間でした。普通の人生を送っていました。このような出来事は私にとって異常なことでした。

でも、それが起きたのは手術の前日のことです。「生きる」と決めたその出来事のと、私は子どもと遊んでいたのですが、その一瞬一瞬が素晴らしい体験でした。私はその瞬間、瞬間とともにいて、それがどれほど価値あることなのかにも気づいていました。これまで経験したことなかでも、最も素晴らしいときでした。

そして翌日、病院で大きな手術を受けました。10日間入院したのですが、手術を受けた数日後に、ある体験が起こりました。

そこには二人の自分がいました。そのうちのひとりとは身体を観察していました。身